

平成28年度 学校評価報告書 (目標設定 (実施結果))

視点	4年間の目標 (平成28年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月7日実施)	総合評価(3月22日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	<p>社会変化に対応できる力を身につけられる教育課程編成に取り組み、確かな学力向上を図る授業改善に組織的に取り組み、考える力を伸長し、基礎力を活用できる人材を育成する</p> <p>「いのち」の尊重に関する教育を充実させるとともに、人権を尊重し、自他の大切さを認められる人材を育成する</p>	<p>生徒の目標と身につけたい力を把握した上で進路実現に向けた教育課程を作成する。(教務・進路)</p> <p>各教科において「考える授業」「わかる授業」に向けた研究授業を実施する。(教務)</p> <p>各教科において単元ごとに生徒が主体的にコミュニケーション能力を活用した学習展開を計画し、実施する。(教務)</p>	<p>高等学校基礎学力テストや大学入学希望者学力評価テストに対応できる教育課程を作成する。(教務・進路)</p> <p>「考える力」を身につけさせる授業というテーマで、各教科で研究授業を行い、全体会において成果・課題を共有する。(教務)</p> <p>生徒の主体的かつコミュニケーション能力を引き出す授業を単元ごとに展開し、授業評価に反映させる。(教務)</p>	<p>学力テスト等の分析結果を基に、生徒に必要な学力を身につけさせるための教育課程の編成にできたか。</p> <p>各教科においてテーマに沿った研究授業ができたか。</p> <p>また、その成果を全体で共有できたか。</p> <p>生徒の主体的なコミュニケーション能力を活用する力を引き出す授業を展開できたか。</p> <p>またその成果を反映できるような授業評価に取り組んだか。</p>	<p>実力診断・判定テストを4月と10月に実施。12月は学力調査(2年)を実施し、結果をともに教育課程編成の検討を進めている。また、キャリア教育として小論文指導や企業見学(秋の社会見学)などの企画を実施するとともに現代社会の授業とリンクさせた労働教育講座に取り組むなど、今後の検証の糧とした。</p> <p>各教科が「考える力」を身につけさせるテーマで研究授業を実施、11月15日には公開授業・研究協議を実施し、生徒による授業評価を実施(年2回)した。「考える力」を身につけさせる授業を展開したことで、成果(教科内での「考える力」を協議)を共有することができた。</p> <p>アクティブ・ラーニングの視点による生徒が主体的にコミュニケーション能力を活用した授業が展開されている。</p>	<p>実力診断・判定テストの結果及び生徒による授業評価の結果から自宅学習が定着していない。また、12月の学力調査の生活実態の結果(来年度)と比較しながら自宅学習への取組を促進する。生徒の今後の指導について検討する目的で模擬テストによる学力分析説明会を企画したが教員の参加が少なく課題として残った。</p> <p>本年度の成果を基に次年度のテーマについて検討するとともに教科を越えた協議を目指し、深化した研究を進める。生徒の授業評価からは「教材が工夫されて取組やすい授業である」「授業のため十分準備している」などの評価を得ているものの、生徒自身の取組が希薄なことから自宅学習等に結びついていないため生徒主体の授業を展開する。</p> <p>アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた学習活動が徐々に広がっているが、いまだ個々の取組で終始していることが多いので、共有や協議できる機会を増やし、生徒の授業評価の観点につなげる。</p>	<p>自宅学習が定着していないのは生徒に目標が見えていないためである。授業に生徒をどのように取り組ませているのか、から始めもっと学びたいと思わせることが大切である。</p> <p>ものの考え方の視点を変えさせる必要がある。例えばPCや携帯ゲームを行う際には、ただ行うだけでなく、ゲームの創り手の視点でプレイヤーの気持ちを読み取ることを考えられれば、テストでは出題者の意図を読み取れる力となる。</p> <p>生徒自身がリーダーとならせる。生徒の隠れた活動を引き出させる仕掛けに教員が取り組み、生徒たちを元気にさせる学校にする。</p>	<p>業者テストの結果から明確な成果と課題を示すことはできなかったが、学習調査の結果から自宅学習の時間が少なく、今後の課題が明確になった。</p> <p>「考える力」を身につけさせるための授業に対する職員の意識は向上したが、組織的な取組にはなっていない。</p>	<p>家庭学習がほとんど定着していないことについては、生徒の学習に対する意識付けができていないことを指摘された。日々の学習活動から学びに対する意欲を引き出すとともに、取り組みの成果を分析するため、改善の状況の見える化を図る。</p> <p>生徒自身に「考える力」を身に付ける大切さを理解させ、主体的に取り組む仕掛け作りを組織的にを行い、個々の教員のスキルを共有化して、生徒の学力向上を図る。</p> <p>「キャリア教育と教育課程の連携」と「探究学習の推進」を取組の柱とし、具体的な手立てとして、考える授業の研究など、組織的な取組を進める。</p>
2 (幼児・児童) 生徒指導・ 支援	<p>基本的な生活習慣の確立を図るとともに、社会の一員として行動するための規範意識を高める</p> <p>他者を尊重し良好な人間関係が築けるコミュニケーション能力をはぐくむ</p>	<p>生徒の生活習慣を整えさせ登校時及び授業での遅刻を削減する。(生活・教務)</p> <p>生徒同士の人間関係を把握する方法を検討し実施する。(生活・生支)</p>	<p>月間遅刻が5回以上の生徒及び習慣化している生徒の指導を保護者と協力して継続して行う。(生活・教務)</p> <p>人間関係について、より実態を把握できるアンケート内容に改善し、速やかな解決を図る。(生活・生支)</p>	<p>遅刻が習慣化している生徒が前年度よりも減少したか。</p> <p>改善したアンケートを作成できたか。</p> <p>また、いじめ等のトラブルが前回調査より減少したか。</p>	<p>遅刻が多い生徒について、担任から保護者への連絡を常に行った。継続的な遅刻者には管理職からの指導を行った。遅刻の延べ実数は増加傾向にある。なお、3年生の進路決定後の遅刻の改善に至らなかった。</p> <p>前年度より時間帯を確定できる質問事項に改正したアンケートを実施した。継続的に指導しているため実数は減少した。また、人権教育を開催し、コミュニケーションを意識した人権への意識を高めた。</p>	<p>遅刻が多い特定の生徒については保護者と連携を図り、継続的に指導を行う。なお、常習的ではない者も含め遅刻に対する生徒の意識が課題である。また、3年生の進路決定後の遅刻対策は学校全体の問題として捉え教務G、進路Gと協働・連携しキャリア教育プログラムとして改善策を検討する。</p> <p>「からかい・いじり」が少ないながらもなくなっていない状況にある。生徒へのアンケートによる投げかけを継続する。また、本当に困っている生徒が申し出しやすい方法を検討する必要があるとともに、人権教育による人権への意識をより一層高める必要がある。</p>	<p>遅刻には様々な原因があるが、本人の自覚により、自分で直したいと思うように仕掛ける。</p> <p>いじめはいつでもあるという認識の上で取り組み、情報を収集することが大切である。保健室が子どもにとって居やすい場所になっていると、養護教諭から有用な情報が収集できるため、保健室環境の整備は重要である。</p>	<p>遅刻は、きめ細かい指導と数値変動の観察から、一部の生徒だけの問題ではないことが示された。特に3年生の進路決定後の生活習慣に課題があることが明確になった。</p> <p>「いじめ」については毎年改善に取り組んでいるが、アンケート結果で「いじめ」をうかがわせる項目の回答をゼロにするのではなく、「いやだ」と感じる生徒に早く気付くことが大切である。</p>	<p>遅刻については、当該学年や生活指導グループの課題ではなく、学校全体の課題として取り組む。</p> <p>「いじめ」については、支援を必要とする生徒の把握ときめ細かいケアをする。さらに、生徒に人権を考える教育を継続する。</p> <p>生徒の自己肯定感を高め、主体的な活動を引き出す。</p> <p>「キャリア教育と教育課程の連携」の取組に関連づけ、食育をはじめとした生徒に好ましい生活習慣の確立の必要性を意識させる取組を進める。</p>

3	進路指導・支援	社会変化に対応できる力を身につけるため学び続ける意欲を高めるキャリア教育を展開する社会的、職業的自立に向け、生きる力を身につけるキャリア教育を充実させる	社会変化に対応できるための人材の育成を目指す「キャリア教育実践プログラム」を検討する。(進路)教育課程との連携によるキャリア教育を組織的に展開できるように見直す。(進路・教務)	既存の進路行事等の成果を精査・検証し、より効果的に生徒の進路実現ができるように組織的な取組を検討する。(進路)将来の進路実現を目指して基礎学力を身につけさせ、さらに大学入試改革に適應できる教育課程作成を推進する。(進路・教務)	客観的な意見が得られる生徒のアンケートを作成・実施できたか。また、分析データとしてまとめられたか。実力診断・判定テストなどを活用し学力の分析ができたか。また、それをもとに生徒への指導ができたか。	進路意識の向上を目的に実施した生徒アンケートでは、生徒の振り返り記述等から判断し、概ね生徒の進路意識が向上した。さらに学年別に様々な進路企画を催し生徒の進路に対する意識を高揚させるとともに、今後を見据え他県の進路指導について情報収集を行った。従来の実力診断・判定テストは学年進行につれて受験者数が減少し、学習状況や受験等の現状を示すだけのデータであり指導データとしての活用は難しいため、受験者数の多いスタディサポートの導入を計画した。	進路行事の振り返りや生徒アンケートの記述から将来に向けた進路を考えている様子を伺うことができたが、統計処理ができる内容に改善する必要がある。今後は、自らの将来を見据え、目的を明確にした進路意識を持たせる必要があることから、他県の情報等をもとに「キャリア教育実践プログラム」の早期改訂と、生徒への周知を図る。スタディサポート(SD)は現状の実力から必要な学習方法や今後の方向性を示すことができるため、これを活用し1年次からの指導の在り方について、教材や分析ツールを十分に活用できるよう計画を検討することが必要である。	指定校推薦での合格者の多くが学びを中断(欠席等により)してしまうという課題がある。一般受験にチャレンジする意識作りを早くしないとけない。生徒は全国レベルのテスト結果に対して教員が学習活動を工夫して組織的に支援する必要がある。指定校推薦が多いのは目標が持てていないからなのか、レベルに見合わない大学を選択しているのではないのか。大学や職業についての説明会も効果はあるが、努力して大学に合格した直近の先輩の声を直接聞き、大学の様子や就職に向かってどんなことをしたかを伝えてもらう機会が効果的である。一部の職員が頑張るのではなく教員のスキルを上げる研修に学校全体で取り組む。業者テストの活用が課題となる。	生徒自身に学ぶ意欲を身に付けさせなければ、高校で学ぶ姿勢が育たず、将来のキャリア形成に影響がでる。さらに、日々の生活にも問題が現れてしまうことを示された。グランドデザインの策定により成長の段階を示したが、身に付く力と、その活用の具体的なイメージを示すことができず、生徒個人の目標設定までにいたらなかった。	キャリア教育実践プログラムを、カリキュラム編成と連動して改善を進める。特にスタディサポートの導入により、教員は生徒の学力を把握し、探求的な学びを追及することで生徒の意欲を高め、高い目標を設定してチャレンジしていく姿勢を育成する。組織的な取組とするため、手立てを構築し、職員が共通理解した上でプログラムに盛り込む。「キャリア教育と教育課程の連携」と「探究学習の推進」の中で具体的な手立てとしてプログラム作成に取り組む。
4	地域等との協働	地域との相互交流により、地域力を活用した教育を推進する学校運営協議会を発足し、地域とともにある学校をつくる	地域力を活用した教育について地域とともに検討する。(管理・広報・生支・生指)学校運営協議会の設置に向けた体制を整備する。(企・管理・広報)	地域に学校の情報を発信するとともに、地域力を活用する。(管理・広報・生支・生指)地域の方々と意見を交換し、協議会設置に向けた具体的な検討を進める。(企・管理・広報)	地域に学校の情報を定期的(月1回)に発信できたか。また、地域力を活用できたか。運営協議会の設置要綱に基づいた設置案ができたか。	「あさひ便り」の自治会配布、地域防災訓練への参加、学校案内表示の地域掲示等、地域力を活用できた。運営協議会の設置案を作成し、次年度に向けた方向性を確認し、検討を進めることができた。	地域の持つ「力」を把握し、学校運営協議会を活用した地域活用の方策を検討する。学校運営協議会をとおして、本校で活かせる地域力の活用を検討する。	保護者にとって安心して通わせたい学校や、身近な高校生として親しみが持てる生徒の育成を目指し、保護者から情報を収集する。スポーツ以外でもfボランティアなどで活躍している生徒もいる。よく経営努力している。3年間でどのような学びによって成長できたのかといったことが求められる中、成長する姿を「見える化」が必要となっている。学力以外でも社会に出て役立つことを見通せるようにする。	地域の力を活用する方法が構築できていない。地域の力の活用にあたっては、本校の特色をより一層広報し、理解を得る必要がある。日々の生徒の行動(挨拶や身だしなみ等)を一層向上させることが大切である。また、3年間の生徒の成長を示すことがポイントとなる。	学校運営協議会を発足し、これまでの地域連携を生かせる体制を構築する。情報発信の精度を上げ、保護者や地域の方が学校に気軽に寄ることができ、生徒の活動を応援してもらえる仕掛けをする。「コミュニティ・スクールの運営・活用」を柱として具体的な手立てとして学校運営協議会における個別部会で検討する。
5	学校管理 学校運営	教員同士のコミュニケーションを活性化し、活気ある学校を目指すとともに人材育成を図る不祥事防止に真摯に取り組む、信頼される学校を目指す情報を迅速に発信し、開かれた学校をつくる防災意識を高め、安心して快適な教育環境を整備する	教育課程と連携した進路指導に係る研修会を実施する。(企)「不祥事ゼロプログラム」を策定する。(企)ホームページの作成・運用の手順を作成し組織的な運用を実施する。(広報)様々な災害を想定した訓練を実施する。(管理)	教員対象に「生徒が自らの進路をしっかりと考える」ための研修会を開催する。(企)「不祥事ゼロプログラム」に沿った不祥事防止研修・事故防止会議等を実施する。(企)ホームページの作成・運用の手順を作成し、HPの更新を定期的に行う。(広報)昨年度までの取組の成果を踏まえ、より防災意識を高められる計画をする。(管理)	研修会を開催できたか。また、研修前と研修後のアンケートにより意識が高まったか。研修等を工夫したか。また、アンケートにより意識を高めることができたか。ホームページの作成・運用の手順を作成できたか。HP更新を定期的(月2回)に行うことができたか。DIG及び防災教育などの取組み方を工夫し、生徒の防災意識が高まったか。	研修会に向けて他県の進路指導の情報を収集し生徒が主体的に進路を目指すためのキャリア教育プログラム改訂に進路支援GL及び教務GLにより土台づくりの学習会に取り組んだ。大学・専門・看護系情報提供会に取り組み出席者も多く好評であった。「不祥事防止ゼロプログラム」を見直し、事故防止研修を定期的に短時間で実施できた。しかし、交通安全のための巡回及び古くなった看板を差し替えた。さらに不審者情報などを地域の自治会と共有し、学校周辺の巡回を実施した。HP掲載手順を作成し定期的な更新ができた。また、見易く分かりやすい画面に修正し、定期的な更新に取り組むことができた。更新手順の統一的な方法を整理し、改めて担当Gを確認した。DIGは1年生全員が情報科授業で実施、職員は研修会で取り組んだ。喫食研修や備蓄食料の見直しを行った。また、生徒対象に震災を実際に体験した講師を招き防災教育を実施予定。	生徒が主体的に学習に取り組み、意欲と向上心を持って進路選択ができるようキャリア教育プログラムを改訂し、教育課程との結びつきを教員に周知し、生徒の主体的な学びを導く授業改善に取り組めるようにする。「不祥事防止ゼロプログラム」に係る研修時期を検討する必要がある。また、地域のニーズに速やかに応じる交通安全指導に取り組む。本校の魅力が伝わるホームページの作成を目指して、様々な情報収集に努めるとともに学校の広報媒体として有効活用できるホームページを目指す必要がある。防災に対して生徒の行動や防災意識を高めることを中心に進めたが、職員の防災意識を高める必要がある。	教員同士の職場内でのPCを使ったNWの有効活用を進める。学校からの情報発信は、まだ拡大できる。ボランティアによる活動は素晴らしい取組であり、周知されていないことは残念である。不審者情報を掲示板などの活用により迅速に流すことができないのか。地域を大切にしている様子が伺えるので、防災についても、連携を続けてほしい。特にDIGを活用した地域の防災マップやハザードマップの作成が双方にとって有効であり、学校の広報にも繋がる。	教員の研修に対する意識は良くなってきていることから、有機的な研修内容にすることで、コミュニケーションの向上が期待できる。特に生徒の進路についての情報共有は若い職員に対して有用な必要情報である。丁寧な情報発信は、学校の信頼を得ることにつながり大切な取組である。生徒に対しては、自分のいのちを守ることを引き続き伝えていく。職員の防災意識をより一層高めなければならぬことが課題としてあげられる。	スタディサポートの新規導入から研修により精度を高め、生徒に還元する必要がある。不祥事防止についても他人事とは思わない校内研修の実施により不祥事ゼロの達成を目指す。ホームページによる情報発信が遅いという課題の解消に向け、担当グループを中心に他グループ等との連携がポイントとなる。生徒・職員の安全を第一として、防災教育の取組を工夫し、職員の防災訓練に対する意識を高める。どんな取組にも職員のコミュニケーションが大切という認識のもと校内組織を越えて話し合える機会を作る。「コミュニティ・スクールの運営・活用」の中で具体的には、学校運営協議会における個別部会で検討する。

